

朝日遺跡出土の動物遺存体

宮腰 健司・佐藤 治

1. はじめに

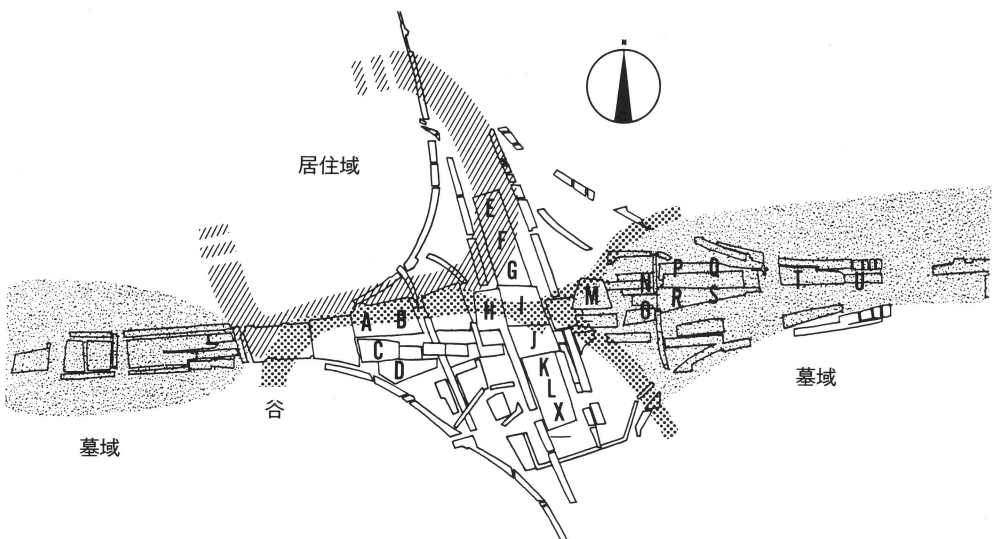
愛知県清洲町・名古屋市を中心として80万㎡に広がる朝日遺跡は、昭和56・60～63年度にかけて調査が実施され、多くの哺乳動物遺存体が出土している。そのうち昭和61年度調査分についての分析が終了したので、ここでその成果を報告したい。

各調査区の位置は第1図のとおりである。概要については、『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』を参照されたいが、出土遺存体2,539点のうち約半数を占める61A B区では、谷南岸に広範囲にある弥生時代中期の貝層より多くが出土し、次に点数の多い61E区・61K L区でも、溝に廃棄された弥生時代中期の貝層からの出土が多数を占めている。

発掘区	出土点数	発掘区	出土点数
61A B	1165	61I	193
61C	98	61J	59
61D	61	61K	11
61E	366	61K L	348
61F	45	61L	2
61G	24	61M	13
61H	150	61X	4

(宮腰健司)

第1表 動物遺存体の出土した調査区とその出土点数



第1図 昭和61年度調査区位置図 (1:8000)

2. 分析

A. 全体の概要

同定できた動物の種は、哺乳類13種、爬虫類2種、両生類2種の他に、種の同定はできなかったが、魚類、鳥類も出土している。

動物遺存体の出土した発掘区とその出土点数を第1表に、各動物ごとの出土点数および推定最少個体数を第2表に、それぞれの占める割合を第2、3図に示す。総出土点数は2540点に及んだ。

イノシシとシカの骨は、ほとんどが骨髓食のために細かく破壊されている。不明とされている骨片のほとんどは、このようなイノシシもしくはシカの骨片であるといつてよい。

B. イノシシ

最も多く出土する。一匹分がまとまって出土することはなく、頭骨や四肢骨はほとんどがバラバラに破壊されており、骨髓食のあとをうかがわせる。

部位別では上腕骨が120点と最も多く、以下下顎骨108点、脛骨80点と続く。推定最少個体数は、右下顎骨の66匹である。

44点出土した尺骨のうち、刺突具として用いられた形跡のあるものは4点のみであり、これはシカのそれと比べると非常に少ない。イノシシの尺骨は骨体が太いため、加工にはより手間がかかる。このために、これらの尺骨は骨髓食にまわされたのであろう。

右肩甲骨を使ったト骨が1点出土している。

C. ホンシュウジカ

イノシシについで多く出土する。イノシシと同様に、四肢骨は骨髓食のために破壊されている。

鹿角は全て、製品化のために加工を受けていた。シカの角は毎年自然に落下する。これを落角というが、50点の角座のうち12点が落角であった。

部位別では、角座（落角を除く）が38点で最も多く、以下上腕骨34点、大腿骨31点と続く。推定最少個体数は、左大腿骨の22匹であるが、角座でも20匹という値が出る。メスには角がないことを考慮すると、もう少し多く見積ってもよいであろう。

中手骨もしくは中足骨も多く出土しているが、ほとんどは製品化のための加工痕をもつ。加工痕もなく原型を保っていたのは1点のみであった。

17点出土した尺骨のうち、11点に加工痕が認められた。いずれも刺突具として用いられたものである。

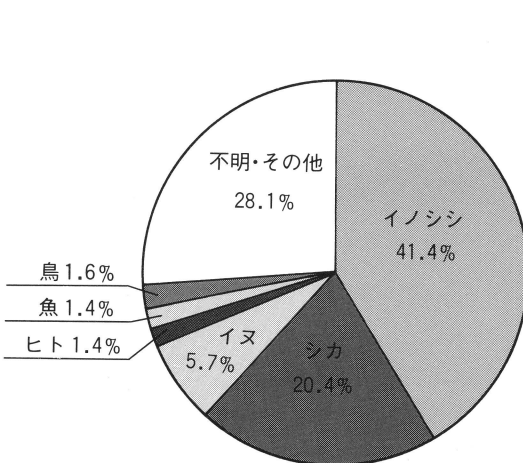
左骨甲骨を用いたト骨が1点出土している。

D. イヌ

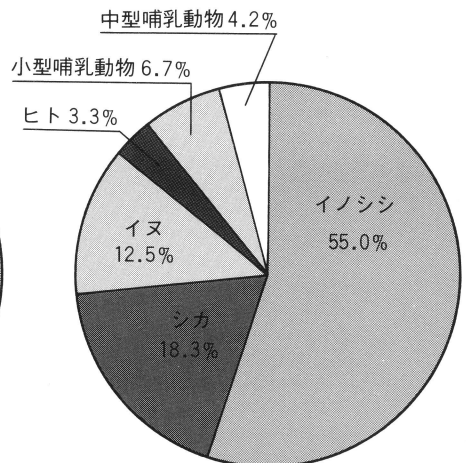
* 出土点数 ** 推定最少個体数

両生綱 AMPHIBIA		*	**
カエル目 SALIENTIA		5	3
ヒキガエル <i>Bufo bufo japonicus</i> (SCHLEGEL)		1	1
爬虫綱 REPTILIA			
ウミガメ科 Cheloniidae		1	1
ヘビ科 Colubridae		6	3
哺乳綱 MAMMALIA			
食虫目 INSECTIVORA			
ジネズミ <i>Crocidura dsinezumi</i> (TEMMINCK)		1	1
コウベモグラ <i>Mogera kobeae</i> (THOMAS)		4	2
霊長目 PRIMATES			
ニホンザル <i>Macaca fuscata</i> (BLYTH)		1	1
齧歯目 RODENTIA			
ハタネズミ <i>Microtus montebelli</i> (MILNE-EDWARDS)		3	3
アカネズミ <i>Apodemus speciosus</i> (TEMMINCK)		2	2
食肉目 CARNIVORA			
オオカミ <i>Canis lupus</i> (LINNAEUS)		2	1
タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides viverrinus</i> (TEMMINCK)		3	1
キツネ <i>Vulpes vulpes japonica</i> (GRAY)		1	1
イタチ <i>Mustela sibirica itatsi</i> (TEMMINCK)		2	2
イヌ <i>Canis familiaris</i> (LINNAEUS)		144	15
偶蹄目 ARTIODACTYLA			
イノシシ <i>Sus scrofa leucomystax</i> (TEMMINCK)		1051	66
ホンシュウジカ <i>Cervus nippon centralis</i> (KISHIDA)		517	22

第2表 朝日遺跡から出土した動物とその出土点数および推定最少個体数



第2図 朝日遺跡出土動物遺存体の比率



第3図 各動物の推定最少個体数の比率
不明は含まれない

イノシシやシカと違い、一匹分がまとまって出土することもある。加工痕や火熱をうけた形跡はみられない。

E. オオカミ

軸椎と大腿骨がそれぞれ1点ずつ出土している。いずれも現生のイヌに比べてはるかに大きい。

F. ニホンザル

小白歯1本、大白歯3本を備えた右下顎骨が1点出土している。

G. 中型哺乳動物

イタチの頭蓋の前半部が破壊されずに残っている。他にもキツネの左肩甲骨が1点、タヌキの橈骨、寛骨、脛骨が1点ずつ出土している。

H. 小型哺乳動物

齧歯目は、アカネズミとハタネズミの2種が出土している。いずれも平野部に多いネズミで、ヒメネズミやスミスネズミのような山地に多いネズミは出土していない。また、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミといった、いわゆる家ネズミがまったく出土していないことも注目される。

コウベモグラの前顎骨1点、上腕骨2点が出土している。現在も西から東へと生息域を拡大しつつあるコウベモグラが、すでにこのころ濃尾平野に進入していたらしい。

I. ウミガメ

ウミガメのこうらの一部が見つかっている。アカウミガメもしくはアオウミガメのものとおもわれる。

J. その他

クジラと思われる大骨片が出土している。

3. 考察

A. 全体の概要

哺乳動物はイノシシとシカが大半を占め、イヌがそれに続き、イタチ、タヌキ、キツネ、ニホンザル、ネズミといった、中・小型哺乳動物がほんのわずかが加わる。これら中・小型哺乳動物の骨には人の手の加わった様子はまったく見られない。偶然に紛れ込んだか、あるいは飼育していたイヌによって持ち込まれたとも考えられる。いずれにせよこれらの動物は食生活の中で重要な位置を占めていたとは考えられない。

このような傾向は同時代の他の遺跡と非常によく似ており、多種多様な動物を産出する縄文時代の遺跡とは大きく異なっているといえよう。

B. 椎骨の出土点数について

第3表は、イノシシとシカの骨のうち主なものについて、部位別に出土数を示したものである。

イノシシの場合、胸椎と腰椎は一匹につきそれぞれ15個、6個ずつあるから、推定最少個体数66匹のイノシシの場合、相当たくさんの椎骨が見つかってよさそうである。ところが実際は、胸椎と腰椎の出土点数は非常に少ない。これに対し、環椎（最も頭に近い椎骨）は、一匹につき1個しかないのに45点も出土している。

松井章氏（奈良国立文化財研究所）は、貝塚から見つかったイノシシ、シカの椎骨の数が他に比べて少ないことから、椎骨は狩りをした場所に捨ててきたのではないかということを講演で話されたことがあるが、朝日遺跡でも同様のことがいえそうである。骨髄もなく骨角器として利用されることも少ない椎骨は、肉を剥した後狩りをしたその場に捨てられ、切り取った肉や内臓は剥ぎ取った獲物の皮にくるんで持ち帰ったのだろう。切り離した頭には椎骨の1～2個がくっついていていたこともあったであろうから、環椎と軸椎の多さも納得がいく。

	イノシシ	シカ	イヌ
下顎骨	108	16	25
上腕骨	120	34	12
尺骨	44	17	6
橈骨	20	24	4
肩甲骨	86	24	11
大腿骨	50	31	6
脛骨	80	30	17
環椎	45	9	4
軸椎	10	10	4
第3～7頸椎	4	19	8
胸椎	25	6	5
腰椎	16	9	5
仙骨	3	1	0
椎骨 小計	103	54	26
総出土数	1051	517	144

第3表 イノシシ、シカ、イヌの主要な骨の出土点数

これはシカの場合にも当てはまり、イヌには当てはまらない。

C. イヌの第2小白歯について

イヌの下顎骨の中で、第2小白歯が生前に抜け落ちているものがいくつもあった。哺乳類の永久歯は一度抜けると二度と生えてこない。顎の骨には歯の抜けた穴が残るが、しばらくすると骨が成長して穴は埋まってしまうので、歯が生前に抜けたのか死後抜けたのかは容易に判別できる。

25点出土した下顎骨のうち、第2小白歯の有無を確認できたものは12点で、そのうちの8点は、生前に第2小白歯が抜け落ちていた。当時の犬の食生活や、犬どうしの喧嘩あるいは疾病をその理由とすると、下顎第2小白歯だけが抜け落ちることは説明できない。ヒ

トの手によって抜歯が行われていた可能性について検討する必要がある。これについては同様のことを直良信夫氏も指摘している。

4. おわりに

骨や角を加工してつくられた道具、いわゆる骨角器に比べると、ただ食べられそして捨てられただけの骨片はほとんど注目されることがない。山のように積まれたコンテナにぎっしり詰まった大量の骨を一つひとつ手にとって同定してみると、意外なところで新しい発見があった。しかし、今回ここに報告したのは現在までに分析をおえた約半分で、残りの半分にはいまやっと手をつけ始めたところである。この作業に約9ヵ月を費やして、現在やっと分析、整理方法のうちの一部が確立されつつあるという状態にある。

今回は不明とした大量の骨片をどう扱うのか、あるいは数個に割られた骨を数量的にどう扱うのかなど、問題点はたくさんある。イノシシの年齢推定や、魚類、鳥類の同定などもやってみれば必ず価値ある成果が得られるはずだが、実際には現生標本の不備などのために手つかずの状態にある。

動物遺存体の分析システムを確立し、いまだ眠っている多くの事実を少しでも多く明らかにしたいものである。

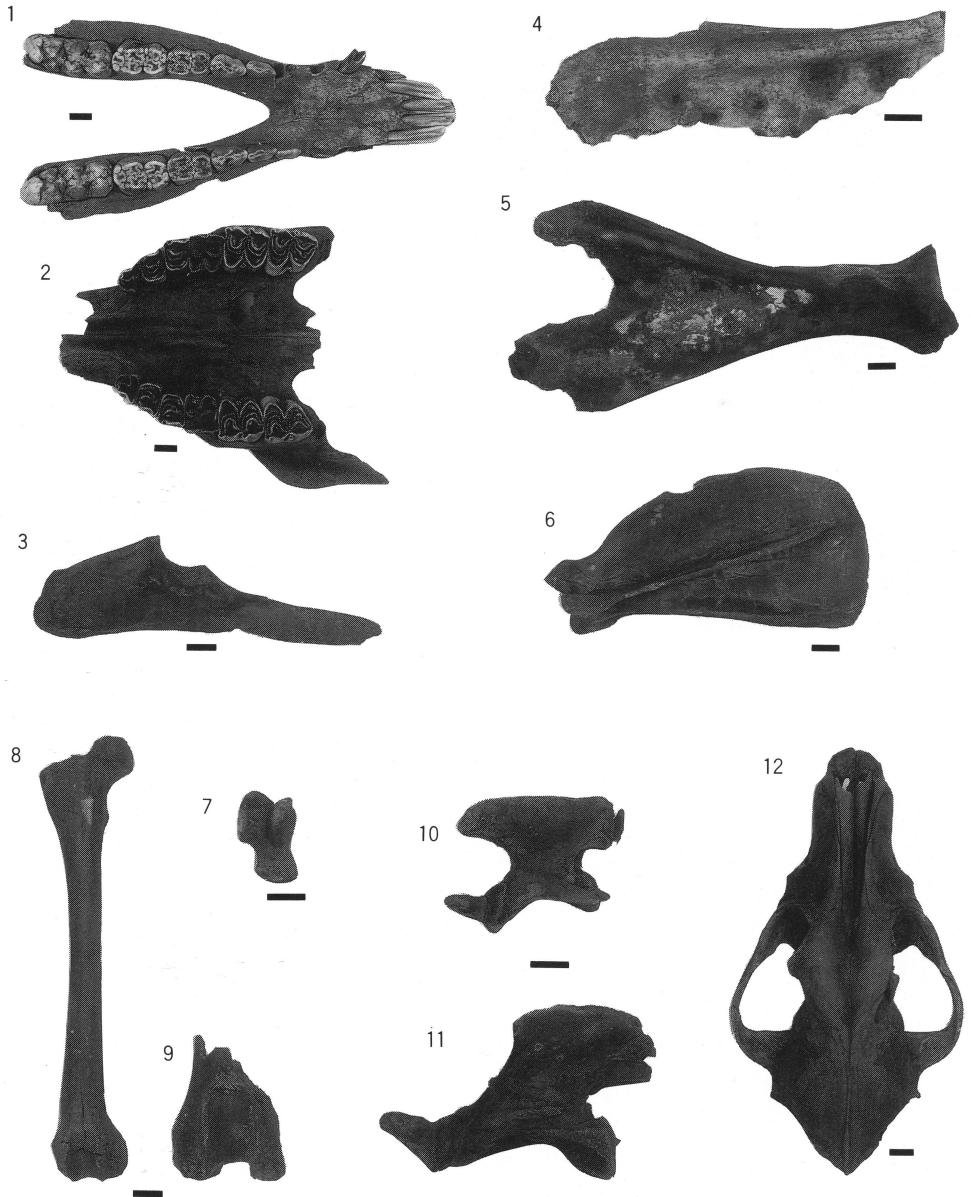
この研究を進めるにあたり、愛知教育大学の河村善也助教授には、貴重な現生標本を多数お借りした。記して謝意を表する。

(佐藤 治)

参考文献

- 金子 浩昌 『貝塚の獣骨の知識』 東京美術 1984
 金子 浩昌・牛沢 百合子 「亀井遺跡出土の動物遺存体」 『亀井遺跡』
 大阪文化財センター 1982
 松井 章 「亀井遺跡(きり広げ部)出土の動物遺存体の分析」 『亀井(その2)』
 大阪文化財センター 1986
 宮崎 泰史 「亀井遺跡出土のイヌについて」 『亀井遺跡』
 大阪文化財センター 1982
 直良 信夫 『古代遺跡発掘の家畜遺体』 校倉書房 242-243 1973
 渡辺 誠 「朝日遺跡61B区貝層のブロック・サンプリング」 『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』 1987
 渡辺 誠・田中禎子 「朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告」 『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和62年度』 1988

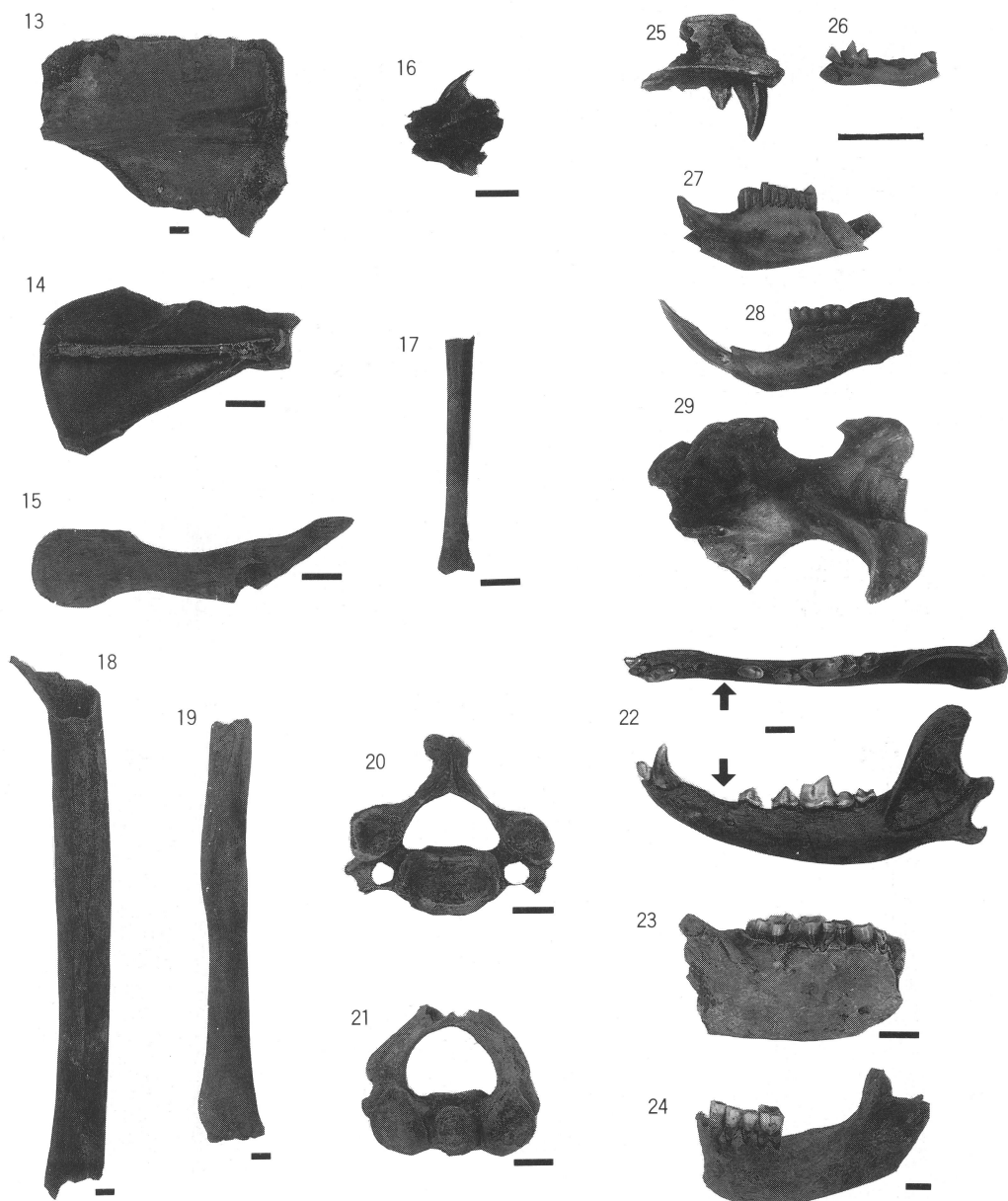
Plate I



1:イノシシ下顎骨 2:シカ上顎骨 3:シカ右尺骨 (刺突具)
 4:イノシシ右肩甲骨 (卜骨) 5:シカ右肩甲骨 (卜骨) 6:イヌ左肩甲骨
 7:イヌ右距骨 8:イヌ右大腿骨 9:オオカミ右大腿骨 10:イヌ軸椎
 11:オオカミ軸椎 12:イヌ頭骨
 8と9, 10と11は同縮尺

1 cm

Plate 2



13:ウミガメこうら 14:キツネ右肩甲骨 15:タヌキ左寛骨 16:イタチ頭骨
 17:タヌキ右橈骨 18:ヒト右大腿骨 19:ヒト左上腕骨 20:ヒト頸椎 21:ヒト軸椎
 22:イヌ左下顎骨 23:ニホンザル右下顎骨 24:ヒト左下顎骨
 25:コウベモグラ左上顎骨 26:ジネズミ左下顎骨 27:ハタネズミ右下顎骨
 28:アカネズミ右下顎骨 29:コウベモグラ左上腕骨

13~24: 1cm 25~29: 5mm